

養護教諭養成教育における臨床看護実習での学び

成川 美和 (家政保健学科・講師)

前田 美和子 (子ども心理学科・講師)

高橋 紀和子 (家政保健学科・非常勤講師)

1. 研究の目的

養護教諭養成教育の科目の一つに看護学がある。本学においては、1、2年次に、「看護学」、「救急看護」、「看護学演習」、「看護学実習」「救急看護実習」の科目を学内で行い、主に3年次の1年を通して臨床看護実習（以下「実習」とする）を学外で行っている。

「実習」を行うに当たり、目標として「学校と連携する地域の関係機関やそこに働く職種の機能・役割と多様な子どもの姿を知り、学校保健を担う上で養護教諭としての姿勢、役割を考える機会となること、さらには死生観を考える機会となること」を掲げている。そして、その目標を達成できるようにプログラム（表1「臨床看護実習プログラム一覧」表2「1週間の流れ」参照）を組み、実施し、今年で3年目が経過しようとしている。しかし、実習での関わりの中で、学生が学び、成長しているという手ごたえを感じるものの、検証までには至っていない。

そこで、本研究では、①実習でどのような場面（見たこと、聞いたこと、体験したこと）を捉えているのか、②そこから何を感じ、どのような学びを得ているのか、③それらが養護教諭としての在り方にどのように結びついているのかを明らかにすることとした。

2. 研究計画

（平成21年度）

- 1) 先行研究等の検討
- 2) 2008年度に実習を行った3・4年生の最終総合レポートから①「実習で捉えた実際の場面の内容」について述べられている文章を抽出する。

（平成22年度）

- 1) ②「実習で捉えた実際の場面から感じたこと、学んだこと」、③「養護教諭としてのあり方にどのように結びついているのか」が書かれた文章を抽出し、分析する。
- 2) 研究報告書の作成

3. 倫理的配慮

学生に不利益が生じないように、研究の協力は任意であり、強制ではないこと、成績とは無関係であることを強調して説明をし、同意の得られた学生のレポートのみを対象とした。個人が断定できないような配慮をし、研究以外の目的では使用をしない。

4. 先行研究の検討

日本養護教諭養成大学協議会報告書（2008年3月）によれば、養成機関の59.2%が、臨

床実習において、「病院により内容とレベルの格差がある」、「実習目的と内容が曖昧、理解されていない」、「小児の事例確保が困難、教育現場で求められる救急処置や多様な疾病と臨床の場が難しく体験の機会が少ない」と感じていた。

平成20年に行われた日本学校保健学会のミニフォーラムでのテーマは、各大学での臨床実習において、何を学ばせることが将来学校における保健管理・保健指導に結びつき、適切な判断と実践力を養えることに繋がるのかということにあった。

筒井（2008）は、臨床実習を終えた学生のレポートから「患者とのコミュニケーション」、「診察介助」、「バイタルサインの測定」、「身体の清潔、食事介助」は経験・見学ができており、「問診」、「保健指導」、「医療的ケア」、「救急時対応」は経験・見学が少なかったと述べ、全体を通しては「コミュニケーション」、「病院の機能と役割」、「医療機関と学校との連携」、「養護教諭に必要な知識・技術・態度」、「意識の変容・自己認識の変容」といった幅広い気づきや学びをしていたと述べていた。

石田ら（2008）は、17項目の評価表を作成し、3施設の指導者が3段階評価した研究結果を報告した。その結果「自主的にできた・気づけた」項目として、「患者とのコミュニケーションがとれる」、「患者の痛みに配慮した行動ができる」、「医療スタッフと適切な情報交換ができる」、「家族の気持ちに配慮した行動ができる」、「生活習慣病の予防と治療方法がわかる」、「実習で学んだ事柄を養護教諭として活用しようと思えることができる」があり、「指導してもできなかった」項目としては、「救急時における医療機関の利用方法がわかる」、「自分の言葉で死生観がわかる」があった。指導者の評価が空欄となっていた項目として「小児生活習慣病・感染症の病児の特徴がわかる」、「長期療養時の情報交換の仕方がわかる」があり、小児入院患者のいる施設で実習させる必要性を感じたと述べていた。

大須賀（2008）は、2007年度の教育内容、方法を改善した結果、「医療チームメンバーの役割・協力体制」、「患者の安全・安楽・自立を考えた支援」、「学生が実施した援助について客観的な評価」、「予防的見地からの患者支援」、「学内カンファレンスに積極的参加」が高くなったことを報告していた。

本田（2008）は、現在養護教諭をしている卒業生を対象に臨床実習での学習ニーズ調査を行った。その結果「患者とのコミュニケーション」、「問診・視診」のニーズは高く「聴診・打診」は養護教諭の診察手段として使われることが少ないことがわかった。

〈引用文献〉

- ・ミニフォーラム「養護教諭の臨床実習において学生に何を学ばせるか」学校保健研究、vol 50 suppl.2008 168.
- ・筒井康子（2008）臨床実習における養護教諭養成課程学生の学び、第39回日本看護学会（地域）抄録集、152.
- ・石田好美・和田節子・藤井寿美子・神戸美絵子・高橋澄子・千葉かおり（2008）養護教諭養成教育の臨床実習のあり方（第2報）第16回日本養護教諭教育学会抄録集、130-131.
- ・大須賀恵子（2008）臨床実習の成果と今後の課題 学校保健研究、vol50 suppl.2008 172.
- ・本田優子（2008）臨床実習における卒業生のニーズと今後の課題 学校保健研究、vol 50 suppl.2008 172.

5. 研究の経過

1) 実習のプログラムと1週間の流れ

実習内容は以下のように展開している。実習にあたり、実習場所の状況、プログラム内容に応じて学生をグループに分けている。グループ編成にあたってはメンバーを固定せずに様々な学生と情報交換や交流が持てるようにしている。(表1、2参照)

表1. 臨床看護学実習プログラム一覧 (15回=2単位) 実習学生数63名

回	事前か実習前日	実習当日	後日か当日	事後学習
1		全体説明会(1日) 実習の心得、個々の実習施設・病院、メンバーの発表		
2	見学施設毎のメンバーと担当教員で、健康状態の確認、各個人の実習目標の発表、共有化を図り、事前の学習状態を作る。	児童養護施設見学(1日) 7施設(学生はいずれか1施設) 1施設に1グループ8～9名	カンファレンス(実習1か所が終了ごとに担当教員とともに)行う。聴いたこと、見たこと、そこから感じたこと、疑問、メンバーと話したいこと、その他自由に発言し合い実習の内容を深める)	実習終了日に「日々の記録」をまとめる。カンファレンス終了後に新たな学びや感想等を追加記録する。評価表の項目を元に自己評価をして担当教員に提出する。
3		精神科専門病院見学(1日) 3回(学生はいずれか1回) 1グループ21名		
4		子ども専門病院見学(1日) 3回(学生はいずれか1回) 1グループ21名		
5	その他メンバー	病院説明会(概要、心得)(1日)		
6～13	間での連絡調整を図り当日に備える。	総合病院(4日) 7病院(学生はいずれか1病院) 1グループ3～4名×17グループ —4日間のプログラム— (医事課)(薬局)(外来一救急、整形、耳鼻科、眼科、外科、内科等)(一般健診)(病棟—外科、内科、回復期リハビリ等)(栄養課)(医療相談・地域連携)(検査課)等		
14		小児科外来(1日) 2病院(学生はいずれか1病院) 1グループ2～4名		
15		総合カンファレンス(1日)		

表2. 1週間の流れ

水	木	金←→火
前日(教員、メンバーとともに明日の実習に向けた目標・健康状態の確認)	実習日(施設見学・病院実習・カンファレンス・前回の記録用紙、自己評価表の提出等)	事前・事後学習

2) 学生レポート分析から得られた結果

分析に得られたレポートは、実習を終えた3、4年生の57であった。

実際の場面が書かれた文章として146が抽出され、34のサブカテゴリー、さらに8のカテゴリーが見出された。詳細については以下の表3に示す。

表3. 実習で捉えた実際の場面の内容

	カテゴリー	サブカテゴリー
1	建物の構造・配置	【安全性を考えた設計】 【療養しやすい環境への配慮】
2	病院側の姿勢（理念）・配慮	【感染予防】 【患者・家族を第一に考える】 【病院環境への配慮】
3	療養環境	【療養環境への配慮】 【子どもへの配慮した環境】
4	専門職の姿	【勉強し続ける医師の姿勢】 【小児科医師の診察する姿】 【医療ソーシャルワーカーの役割・姿】 【患者とコミュニケーションを図る看護師の姿】 【看護ケアの重要性】 【多職種・多機関の連携】 【個別にあった対応】 【治療を受ける子どもへの配慮】
5	現場の方の現状の話	【虐待の現状】 【児童養護施設の実情】 【精神科の実際】 【精神科のイメージへの変化】 【検査の実際】
6	現場の方の仕事や対象者への思い	【プロ意識】 【共感的態度】 【相手を一番に考えた姿勢】 【治療を受ける子どもへの配慮】 【子どもの発育・発達に対する工夫】
7	患者とのふれあい（コミュニケーション、バイタルサイン、車いす援助、清拭の援助等）体験	【闘病する人の気持ち】 【知識・技術の不足】 【コミュニケーション術】 【保護者の心情を知る】 【家族の不安な気持ちの理解】 【患者さんへの食事介助やコミュニケーションの体験】
8	様々な子どもたち・家族の姿	【様々な子どもたちの姿】 【闘病する人の姿】 【病気の家族を抱えた家族の姿（子どもの親、兄弟）】

学生らは、これらの実際の場面を「非日常的な貴重な体験」と捉えられていた。レポートに書かれていたある一文を例にあげると「今まで触れた事のなかった新しい世界とその中に流れる特別な時間の体験」と表現していた。

6. 今後（平成22年度）の予定

今後は②「実習で捉えた実際の場面から感じたこと、学んだこと」、③「養護教諭としてのあり方にどのように結びついているのか」が書かれている文章を抽出し、分析・考察する。研究結果から今後の臨床看護実習のプログラム内容及び実習の方法等を検討していきたい。